鉄道マニアではないが、地方に出張することが多く、各地のJRを利用することがある。 特にここ2年ほど、神話の企画の取材のため九州各地を訪れており、おのずとJR九州を利 用する。

JR九州の南部沿岸部すなわち、宮崎~鹿児島間の快速や特急(車両が長い)にのると、 座席の前ポケットに、津波が来たらどう対処したらいいのか説明している「津波避難マニュ アル」が置いてある。昔から津波を起こしてきた日向灘に沿って走っているから必要なのだ ろうが、まるで、脱出マニュアルが常備されている飛行機に乗っているような気持になる。



JR 九州が各座席に設置している津波避難マニュアル

以前、JR西日本の和歌山線の電車には津波避難マニュアルがなかったので、聞いてみたが、明確な回答がなかった。もちろん和歌山線では各駅に避難の案内がたくさんあり、電車を使った避難訓練をしているのだが、各地のJRによって対応の違いがあるのには、少々違和感があるのだが。どこへ行っても、観光地の場合、どこまで危機感をあおる必要があるのかよく議論されるところだが、津波避難の心得はどこにいても必要不可欠なのだから、対応を一つにしないと、利用者の危機意識に期待するには不十分な気がするのだが。

先日、西日本豪雨で大きな被害を受けた某自治体の防災検討会を取材した際、災害のたびに高齢者避難をどうするのかという議題で、有識者らからは、「逃げれる高齢者は地域で助け、そうでない高齢者は行政が対応するべきだ」と提言があった。これに対し、某自治体の幹部から「そうはいわれても対応できるかどうかわからない」との意見がだされた。もっとも有識者がいう「行政」の定義は明確でなかったので、幹部は市役所本体のみが対応するべきと受け取ったようだが、それまでも議論を重ねてきただけに、有識者らからは「西日本豪雨の教訓を本当に生かす気があるのか」という懸念の声があがった。

組織内のガバナンスと社会の要請とずれがあることはあるが、JRの事例にせよ、某自治体の対応にせよ、ことは社会をゆるがす自然災害のことだけに、「平和ボケ」もここまで浸透するとはといまさらながら唖然とするばかりだ。

11月25日三島由紀夫没後50年の日にて

(令和2年11月)